



Osaka Gakuin University Repository

Title	日英語における連続動詞構文：非定形動詞の比較 Serial Verb Constructions in English and Japanese: Non-finite Forms Comparison
Author(s)	近松 明彦 (CHIKAMATSU AKIHIKO)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 34 巻第 1・2 号：1-27
Issue Date	2023.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

日英語における連続動詞構文：非定形動詞の比較

近 松 明 彦

Serial Verb Constructions in English and Japanese: Non-finite Forms Comparison

CHIKAMATSU AKIHIKO

ABSTRACT

This paper aims to clarify the presence of serial verb constructions in Japanese and English. While some linguists have argued for the existence of serial verb constructions in Japanese, others have asserted that such constructions do not exist in English. In this paper, we propose two general forms: (1) “the general form of serial verb constructions with *renyoukei* in Japanese” (“Verb 1 + Verb 2, where Verb 1 is infinitive”) and (2) “the general form of constructions related to serial verbs in English” (“Verb 1 + Verb 2, where Verb 2 is non-finite”). We examine whether the *renyoukei* forms of Japanese verbs correspond to English infinitives, considering that there may be minimal differences between (1) and (2). Our analysis investigates whether the *renyoukei*/infinitive form of Japanese verbs aligns with the primary usages of English infinitives. The results indicate that there are instances where Japanese *renyoukei* forms functionally correspond to English infinitives, but there are also instances where they do not. This suggests that while serial verb constructions in Japanese may share properties with English constructions related to serial verbs, we cannot definitively claim that the two languages entirely share properties of serial verb constructions.

1. はじめに

本稿は、連続動詞構文が日本語、及び、英語に見られるのか、見られないのか、という問題を解明することを目的とする。

まず、連続動詞パラメータ等の原則、日本語における連続動詞構文、英語における疑似連続動詞構文を概観したうえで、英語の不定詞と比較・対照するという観点から日本語における連用形を考察する。「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」を仮定したうえで、日本語動詞の連用形が一部の英文による文献において *infinitive* と呼ばれていることに着目しながら、両者の間の相違がさほど大きなものではないのではないか、という可能性について、検討する。そのために、英語動詞の不定詞と日本語動詞の連用形の用法に関する対照分析を試みる。英語の不定詞の主要な用法について、その各例文の和訳を分析し、英語不定詞と日本語動詞の連用形の対応関係を確認する。

そしてその結果、英語不定詞と日本語連用形動詞の間の用法上の対応が部分的な対応であることを示す。更にそのことから、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」が完全な対応を示すのではなく、部分的対応を示すという結論を示唆する。

以上のことを通して、連続動詞構文が日英語の各々に見られるのか、見られないのか、という問題について、また、動詞連続に関する一般言語学的な理解について、何らかの示唆が得られるのではないかと考える。

2. 連続動詞構文について

郡司 (2011) は、その第3節「日本語の位置」において、H「連続動詞パラメータ (serial verb parameter)」を取り上げている。それによると、動詞連続パラメータとは、

- (1) 1つの動詞句に複数の動詞が含まれていてもよい。

(郡司, 2011:7)

といったものとされている。そして、同論考は、「日本語でも、次のような複合動詞は連続動詞の一種と考えられる。」（郡司, 2011:8）ということ述べ、次のような例を挙げている（次のa.の例では目的語が共有されており、b.の例では主語が共有されている、と郡司（2011）は指摘している）：

- (2) a. (糊を) 煮溶かす、(ほこりを) たたき出す、(糸を) 巻きつける
b. (彼らが) 泣き崩れる、(皆が) 歩き疲れる、(我々が) 飲み歩く
(郡司, 2011:8)

このように、郡司（2011:8）においては、日本語に関して、上記の動詞連続が該当すると考えられている。一方、郡司（2011:8）に見られる「英語と日本語のパラメータ対応」（郡司（2011:8）における(16)の表）においては、その末尾（右端）に見られるパラメータHの箇所で、英語に関して「×」という値が、日本語に関して「○」という値が与えられている。このことから、郡司（2011）においては、この「動詞連続」が日本語に当てはまるのに対し、英語には当てはまらないという判断がなされていることがわかる。

3. 日本語における連続動詞構文

上の郡司（2011:8）における動詞連続に関する考え方と関連付けられ得る見解として、浅尾（2009）に見られる見解を挙げることができる。浅尾（2009）は、動詞連続に関する日韓対照分析を行っているが、その中では次の3種類の形式が議論の対象として取り上げられている。

- (3) a. 日本語連用形動詞連続
走り去る
b. 日本語テ形動詞連続
持って行く

c. 韓国語-e 形動詞連続

kal-a tha-ta

替える -e 乗る

乗り換える

(浅尾, 2009: (1))

上に引用した3種類の形式について、浅尾(2009)は、その注1の中で「これらの構造には従来、複合動詞(compound verb)、補助動詞構文(auxiliary verb construction)、連続動詞構文(serial verb construction)をはじめさまざまな名称が与えられてきている。ここでは、理論的な位置づけにかかわらず、表面上動詞が連続しているものを全て議論の対象とするため、便宜上『動詞連続』という用語をカバータームとして用いることにする。」(浅尾, 2009:1)と述べている。このように、日本語で伝統的に複合動詞や補助動詞構文などの名称で言及されてきたものを、類型論的・普遍的な文脈の中で動詞連続の一種として解釈するという見方が存在するものと理解することができる。

ここで、郡司(2011)における動詞連続と浅尾(2009)における連続動詞構文を比較しておくことにする。冒頭で郡司(2011:8)から引用した例、すなわち、「(糊を)煮溶かす」「(ほこりを)たたき出す」「(糸を)巻きつける」「(彼らが)泣き崩れる」「(皆が)歩き疲れる」「(我々が)飲み歩く」などの例は、上に引用した浅尾(2009: (1))における、「日本語連用形動詞連続」(例:「走り去る」など)に相当するといえると筆者は理解している。しかし、先に見た郡司(2011)における動詞連続において、連続動詞構文の有無が言語類型論上のパラメータとして扱われていたのに対し、浅尾(2009)においては、上でも引用したように、「便宜上『動詞連続』という用語をカバータームとして用いることにする。」(浅尾, 2009)という立場を採っている。連続動詞に関する定義に様々なものがあり、一口に連続動詞といってもその内容は多様であるように見える。そのようなことから、動詞連続という概念を、ただ厳密な媒介変更(parameter)として捉えるだけでなく、言語学の研究史の中で、事実上存

在してきている概念として捉える方が実情に合っているという認識も交える方が望ましいと本稿においては考えている。

4. 英語における連続動詞構文

郡司（2011: (16)）においては、上記の動詞連続が日本語に関して該当するのに対し、英語について該当しないものと見做されていることを本稿は上での議論の中ですでに確認していたが、ここで、Pullum（1990）による指摘を取り上げることにはしたい。

Pullum（1990）は、現代口語英語における擬似連続動詞構文（quasi-serial verb constructions）を取り上げている。そして、その中で主に分析の対象とされているのは、次の例に見られるようなものであって、Pullum（1990:218）はそのような型の構文を *go get* 構文（*go get construction*）と呼んでいる。

(4) Come fly with me.

(Pullum, 1990:218)

とはいえ、この *go get* 構文は、標準的な現代英語の表現としては十分一般的なかたちで定着していると断言することは難しいと筆者には感じられる。*go get* 構文は、例えば次のような、*to* 不定詞を伴った、より一般的で標準的な形式と競合しているように見える。

(5) Her children seldom come to see her.

(Declerck, 1991:180)

また、江川（1991: § .247, B. (1)）は、“*go to see*” と同じ意味で、“*go and see*” という形式が用いられることを示したうえで、類例として次のような等位接続の例などを挙げている。

(6) Come and stay with us.

(江川, 1991: §.247, B. (1))

さらに、江川 (1991: §.247, B. (1)) は、「『米』の口語ではgoに続く and が省略されることがある。」としながら、次の例を挙げている。

(7) Go fetch some water.

(江川, 1991: §.247, B. (1))

この“go fetch”を用いた例は、Pullum (1990) における *go get* 構文の例と同一視することができると筆者は考える。そうであるとすれば、*go get* 構文が等位構造の省略形である、という解釈も取り敢えず成り立つかもしれない。

このように、英語においては、部分的に擬似連続動詞構文があるものの、連続動詞構文と比較し得る一般的な英語の構文として、等位接続構造を挙げることができると筆者は考える。さらにそれとともに、連続動詞構文と近い性格を持つ英語の構文としては、主動詞 (main verb) にもう一つの動詞の non-finite の形式が後続するという構造を挙げることができると筆者には思われる。

村田 (2013) においては、中国語における動詞連続構文 (連続動詞構文) と対照する文脈で、「英語では、動詞連続構文はほぼ全て容認されない。代わりに、動詞を分詞や to 不定詞に『格下げ』して表現する。」(村田, 2013:58) ということが述べられている。そして、それに続いて、村田 (2013) においては、他の例とともに、次のような分詞構文の例などが挙げられている。

(8) He came into the room, singing a happy song.

(村田, 2013: (32c))

このように、英語連続動詞類似構文の一般形式は、一般に次のような形

式（英語連続動詞類似構文の一般形式）を持っていると考えることができると筆者は考える。

(9) 英語連続動詞類似構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2，ただし動詞 2 は non-finite.

5. 英語の不定詞との比較の観点から見た日本語の連用形

このような連続動詞構文と比較し得る英語の構文に関して、日本語の連続動詞の分析と対比するとどのようなことが言えるであろうか。上で引用した浅尾（2009: (1)）における、日本語連用形動詞連続（例えば、「走り去る」など）、日本語テ形動詞連続（例えば、「持っていく」など）に関して、連続する2つの動詞のうち、ひとつ目の動詞は、それぞれ、連用形、テ形という特定の活用形が現れている。すなわち、日本語の連続動詞構文とされるものにおいて連続するふたつの動詞のうちの一方は、必ずしも特徴的でないとは言えないと筆者は感じるのである。このことは、ちょうど英語において、主動詞にもう一つの動詞の non-finite の形式が後続するという構造が、連続動詞構文と比較し得るものであるとする、上記の見解（本稿の見解）を思い起させる要素があると筆者は考える。すなわち、この議論のなかで、日本語における連用形やテ形が、英語における non-finite の形式と比較され得る状態になっていると筆者は考える。そのようなことから、ここでは、特に日本語における動詞の連用形について、若干の分析を試みることにする。

6. 日本語における連用形の用語法について

Iwasaki (2013:79) は、日本語の動詞「飲む」を例として、子音動詞 (consonant [root] verb) の例である *nom-* (「飲む」) の活用上の諸形式を表 (Iwasaki (2013:79) の Table 1. “Consonant verb forms”) の中に示しながら、次のように述べている。

- (10) The stem with the =i-suffix is the infinitive form.

「=i-接尾辞を伴う語幹は、不定形 (infinitive form)」である。」

(Iwasaki, 2013:79)

このIwasaki (2013) による記述は、実質的に日本語の動詞「飲む」の連用形「飲み」について述べており、日本語において伝統的に「連用形」と呼ばれてきた形式が、Iwasaki (2013) における infinitive (「不定詞」) に対応していると理解することができる。Iwasaki (2013:79) は、その注1において、この infinitive という用語が Martin (1975) によるものであることを指摘したうえで、その形式が伝統文法において連用形として知られているものであることを示し、さらに、この infinitive に当たるものが Shibatani (1990) における “adverbial” form (「副詞」形)、Kuno (1973) における “continuative” form (「継続」形) など、様々な形で英訳され、広い範囲に及ぶ機能を示唆している、といった内容のことを述べている (Iwasaki, 2013)。そして、確かに、Martin (1987) においては、infinitive に関する記述に多くのページが割かれている (しかも、infinitive に関する議論の多くが、adverbializations に関連した文脈の中に見られ、このことは、Shibatani (1990) において連用形が “adverbial” form (「副詞」形) という表現で言及されていることを思い起こさせる)¹⁾。ちなみに、池田 (2013) に基づくならば、日本語動詞の連用形を infinitive として扱うことは、少なくとも1940年代の Bernard Bloch による研究にさかのぼることができる。Bernard Bloch の分析に基づくならば、例えば「待つ」の Infinitive、すなわち、[不定詞形] は、mát-i であるという (池田, 2013)。これは、伝統的に連用形と呼ばれている形式と合致している。

7. 日英語の連続動詞構文の可能性について

ここで、浅尾 (2009) における日本語連用形動詞連続を再び取り上げる

1) Samuel Martin による著書、*A Reference Grammar of Japanese* について、筆者が直接参照した版は、Martin (1975) でなく、Martin (1987) である。

ことにする。日本語連用形動詞連続は、例えば次のようなものであった。

(11) 走りさる（= (3a)）

（浅尾, 2009）

もし日本語動詞の連用形がinfinitiveであるとすれば、上の連用形動詞連続は次のような形式（「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」）を持つものとして一般化できると筆者は考える（敢えてinfinitiveという英語による用語を使っている）。

(12) 連用形による日本語連続動詞構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2，ただし動詞 1 はinfinitive.

例えば、上に例示した「走りさる」であれば、前半に現れる連用形「走り」は動詞 1 に相当し、敢えて英語の用語を使うとすれば、infinitiveと呼ぶことができる。それに対し、後半に現れる終止形の動詞「さる」は動詞 2 と見なすことができる。この「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」は、本稿における上の議論で示した「英語連続動詞類似構文の一般形式」、すなわち、次に再録するものを思い起こさせるであろう。

(13) 英語連続動詞類似構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2，ただし動詞 2 はnon-finite. （= (9)）

日本語動詞の連用形がinfinitiveであるとし、それが英語のinfinitiveと比較可能なものであるとすれば、それは、non-finiteのひとつであり、そのように考えると、日本語の「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」が「英語連続動詞類似構文の一般形式」と近い関係にあると論ずることができる可能性が生じてくる。

ただし、日本語においてinfinitiveであるのが、動詞 1 であるのに対し、英語においてこれに対応するnon-finiteとなっているのが動詞 2 であると

いうことについて、留意すべき点がある。日本語と英語の語順の相違によって説明されるものと筆者は考えている。例えば、次の英文とその和訳を比べてみることにする。

(14) a. The prizewinners *stepped forward proudly*.

b. 入賞者は誇らしげに前に出た。

(江川, 1991:136)

前者の英文において副詞 *proudly* が動詞 *stepped forward* に後続した位置に現れるのに対し、後者の和訳において副詞的要素（言語学的には副詞的に機能する後置詞句）である「誇らしげに」は動詞「前に出た」に先行した位置に現れている。このように、副詞的に機能する要素は、英語では動詞に後続し（すなわち、動詞の右側に生じ）、一方、日本語では動詞に先行しており（すなわち、動詞の左側に生じており）、このことは、語順に関して日英語間で対称的な状態を生みだしている。ここで、日本語における「動詞 1」にせよ、英語における「動詞 2」にせよ、infinitive の、あるいは、non-finite の動詞的要素が副詞的（adverbial）に用いられた要素であるとするならば、英語では動詞に後続する要素となり（「動詞 2」として具体化）、日本語では動詞に先行する要素となる（「動詞 1」として具体化）。このように、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」の間に見られる、infinitive/ non-finite と定動詞の語順に関する対称性は、副詞的要素と動詞の語順についての日英語間の差異の例の一部を成すものとして説明することができる²⁾。

ここで、上ですでに触れた事柄であるが、郡司（2011:8）において、動詞連続パラメータが、日本語に該当する一方で、英語について該当しないものと考えられているという見解（郡司, 2011: (16)）に立ち返ることに

2) なお、この分析は日本語の連用形が副詞的に機能していることを前提としており、このことは、連用形における、いわゆる中止法が等位構造と関係するという分析よりも、むしろ、副詞的な従属節と関係するという分析の方を支持する要素があることを示唆している。

する。なるほど、infinitive/ non-finiteと定動詞の間に、日英語間の語順上の対称性が含まれはするものの、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」の間には、相当な平行関係が存在する可能性があることを我々はすぐ上で見た。もしそうであるとすれば、郡司（2011）の言う、動詞連続に関する日英語の間の差異・対立が、実は余り明確なものではなくなってしまう可能性がでてくる。

8. 日本語の連用形の機能と英語不定詞の機能

以上のように、日本語の連用形が英語の不定詞等の non-finite の要素に近い性格を持つのではないかという仮定のもとに議論したが、この仮定は、日本語の連用形に相当する語形が、英語圏の研究者によって infinitive として分析されてきているという学説史上の経緯に依存しており、また、用語法に基づいた仮定でもある、といった点で十分確実なものではないと言える。日本語動詞の連用形と英語の不定詞が適切に比べられると判断するためには、単に用語が共通しているからというだけでは根拠が十分ではなく、本来は、日本語の体系の中で連用形がどのように振舞うかということと、英語の体系の中で不定詞がどのように振る舞うか、ということに関して対応関係を確認することが求められるであろう。

英語の不定詞については、伝統文法において、分詞、動名詞とともに準動詞の一つとして扱われることが一般的であろう。そして、準動詞は、non-finite verb、すなわち「非定形動詞」と同一視されると言える。伝統文法では一般に、英語の不定詞の用法は、名詞用法、形容詞用法、副詞用法（副詞用法には、更に目的、結果、原因、理由、ほか、多くの下位区分がある）に分類され、加えて不定詞に関係した個別の特徴的構文等に関する分析が行われることが多い（例えば、江川（1991:Ch.13）など）。ここで、江川（1991:Ch.13）の挙げている英語不定詞の諸用法の用例を以下に引用する（副詞用法については、目的、結果、原因、理由等が主要なものと考えられるので、それ以外の副詞用法やその他の不定詞に関係した特徴的構文等については、ここでは省略する）。

- (15) a. 名詞用法：To become an expert at anything takes time.

(江川, 1991:315)

- b. 形容詞用法：There's a lot to see in Rome.

(江川, 1991:318)

- c. 副詞用法（目的）：What are the raw materials used to make plastic?

(江川, 1991:319)

- d. 副詞用法（結果）：My grandfather lived to be ninety.

(江川, 1991:319)

- e. 副詞用法（〔感情などの〕原因）：

We are delighted to learn of the arrival of your baby.

(江川, 1991:319)

- f. 副詞用法（〔ある判断の根拠になる〕理由）：

What a fool I was to think that she really loved me!

(江川, 1991:319)

なお、上記の各用法のうち、連続動詞構文との関連で特に注目されるのは、副詞用法である。副詞用法の例においては、定形動詞と不定形動詞という違いはあるものの、同じ節の中に2つの動詞が共存することになるという点で、連続動詞構文との類似性が見られるからである（本稿冒頭で引用していた連続動詞パラメータ、すなわち、「1つの動詞句に複数の動詞が含まれていてもよい。」（郡司, 2011:7）という原則を参照）。例えば、上の例におけるa-文からf-文のうち、副詞用法の例であるc-文からf-文のそれぞれについて、c-文であれば定動詞 *used* と不定詞 *to make* が、d-文であれば定動詞 *lived* と不定詞 *to be* が、e-文であれば定動詞 *are delighted* と不定詞 *to learn* が、f-文であれば定動詞 *was* と不定詞 *to think* が、同じ節の中に共存しているということになる。このように、連続動詞構文との関連性という観点から言って、特に副詞用法について最も注目される要素があるのであるが、とはいえ、名詞用法、形容詞用法も含め、以下に英語の不定詞の複数ある諸用法に対応する日本語の例文を確認していくことにする。

I. 名詞用法

上記の(15)のa-文、すなわち、“To become an expert at anything takes time.”
(江川, 1991:315) に対応する日本語としては、次のものなどがある。

(16) a. 何事にせよエキスパートになるには時間がかかる。

(江川, 1991:315)

b. いかなることの専門家になることも、時間を要する。…… (直訳)

(拙訳)

ここで、小泉 (2008:27-8) が、「動詞を名詞に転用する場合、2つの方法がある。」としていることを思い起こしてみることにする。小泉 (2008:28) は、動詞を名詞に転用する方法として、「語幹母音を /i/ とする方法」(語幹末母音による名詞化)と「形式名詞『コト』や『ノ』を動詞の形容詞形が修飾する形で名詞句を形成する方法」³⁾ という2つの方法に触れている。これら、2つの方法のうちで、上に示した「直訳」(筆者が訳したb-文)では、「形式名詞『コト』や『ノ』を動詞の形容詞形が修飾する形で名詞句を形成する方法」を用いている。それに対し、比較のために、もう一方の方法である「語幹末母音による名詞化」(言い換えると、連用形による名詞化)を行うと、この場合、次のように容認不可能な文が得られることになってしまう。

(17) *いかなることの専門家になり (「成り」) も、時間を要する。

(筆者の作例)

このことは、日本語動詞の連用形／infinitiveによる名詞化が、non-finiteの動詞の名詞用法というよりも、動詞から派生された完全な名詞であることを示している。ちなみに、動詞から派生された名詞「なり」の例としては、例えば、次のようなものを挙げることができる(複合語「法人成り」

3) 「動詞の形容詞形」という用語については、小泉 (2008:162) において「本書では『連体形』を『形容詞形』と呼ぶ。」とされている。

の構成要素として「なり」が用いられている例)。

(18) 「年の途中で法人成りをした場合の法定調書の提出」

(国税庁「年の途中で法人成りをした場合の法定調書の提出」)

この「成り」のほかに、例えば、動詞「走る」の連用形／infinitiveである「走り」を用いた次の例を見れば、連用形／infinitiveが名詞として用いられることがわかる。

(19) 彼らはジョンの素晴らしい走りに大いに感心した。

(筆者の作例)

このように、日本語動詞の連用形／infinitiveは、確かに名詞化の方法として用いられるが、とはいえ、英語の不定詞の名詞用法に直接対応する用法を見出すことはできない。

II. 形容詞用法

次に、上に引用した形容詞用法の例、“There’s a lot to see in Rome.” (江川, 1991:318) に対応する日本語の文として、次の文を考えることにする。

(20) a. ローマには見物すべき名所が多い。

(江川, 1991:318)

b. ローマにはたくさんの見るものがある。…… (直訳)

(拙訳)

c. *ローマには見たくさんのものがある。

(拙訳)

すぐ上のb-文に現れている「見るもの」について、日本語における「見る」は「もの」という名詞を修飾する要素として機能している。この場合の「見る」は伝統文法では連体形であり、連用形／infinitiveとは異なってい

る。この点で、英語の不定詞の名詞用法と日本語の infinitive は対応していないように見える。このことは、すぐ上の c-文で明確に確認される。この c-文では、（誤植でなく）「みる」の連用形である「み」（「見」）が「たくさんのものの」直前に生じている。例えば、「ローマには見るべきたくさんのものがある。」（筆者の作例）という適格文と比較すればわかるように、「たくさんのもの」という名詞句の直前の adjectival な要素のための位置に連用形「み」を生起させてみた場合、容認することが不可能な文が生まれてしまう。このことは、連用形を形容詞的に用いることができないということを示している。

以上のように、形容詞用法については、日本語の連用形／infinitive は対応していないように見える。

Ⅲ. 副詞用法

それでは、上で「連続動詞構文との関連で特に注目される」ものとして言及した副詞用法についてはどうか。江川（1991:319-20）は、英語不定詞の副詞用法の下位区分として、「目的」、「結果」、「原因」、「理由」、「条件・仮定」、「一般に形容詞と結合して」、「独立の語句として」等を挙げている。本稿では、そのうち特に主要なものとして、以下に「目的」、「結果」、「原因」、「理由」を取り上げることにする。

（A）目的

まず、上で引用した英語不定詞の副詞用法の目的の例 “What are the raw materials used to make plastic?”（江川, 1991:319）に対応する日本語文はどのようなものになるであろうか。

- (21) a. プラスチックの原材料は何ですか。

（江川, 1991:319）

- b. プラスチックを作るために用いられる原材料は何ですか。

……（直訳）

（拙訳）

c. *プラスチックを作り用いられる原材料は何ですか。

(拙訳)

すぐ上に示したb-文(拙訳)では、目的を表わす形式として、連用形／infinitiveではなく、「作るために」という形式を用いている。これは、複合格助詞「のために」が「『の』を介さずに用言につくもの」(山田, 2004:48)の形で用いられたものである。それに対し、上のc-文に見られるように、b-文における「作るために」を「作り」という連用形と取り換えると、容認不可能な文になってしまう。

このように、日本語の連用形／infinitiveは英語の副詞用法の目的の例には対応しておらず、連用形／infinitiveと異なる日本語の形式がこれに対応しているということになる⁴⁾。

-
- 4) 多胡(2010)は、日本語に関して、「移動動詞『行く』と共起している二格をとる句」に関して、「空間性をもたず、目的規定的な結びつきがあるもの」の例として次のものを挙げている。

(i) 勉強をしに行く。

(多胡, 2010:106)

このように、日本語においては、確かに動詞の連用形／infinitiveに「に」が付加された形式が移動動詞と共起することが可能である。「行く」だけでなく、次のように、例えば、次の動詞「入る」を用いた例にも同様のことが当てはまる。

(ii) メアリーはコーヒーを飲み喫茶店に入った。

(筆者の作例)

このように、「連用形／infinitive+に」という形式で目的を表わすことが可能であるが、次のように、「に」を省略して、連用形単独で目的を表わすことはできない(φは空所を表わす)。

(iii) *メアリーはコーヒーを飲みφ喫茶店に入った。

(筆者の作例)

また、上の例は移動動詞に関する例であったが、次のように、このような二格は「買う」と共起することはできず、「ために」などの形式を用いて目的を表わすことになる。

(B) 結果

次に、同じく英語の不定詞の副詞用法の結果について考えることにする。上で引用したこの用法の例、すなわち、“My grandfather lived to be ninety.”（江川, 1991:319）に対応する日本語の文はどのようなものになるであろうか。

(22) a. 祖父は90歳まで生きました。

(江川, 1991:319)

b. 祖父は生きて、その結果、90歳になった。……（直訳①）

（拙訳）

c. 祖父は生き、90歳になった。……（直訳②）

（拙訳）

上のb-文の直訳①では、「生きて」というテ形を用い、c-文の直訳②では、「生き」という連用形を用いている。c-文の直訳②は、「結果」を表わすというニュアンスがやや希薄であり、やや不自然さを伴うように感じられる面を伴うということもあるが、筆者は一応、容認可能であると判断する。

しかし、このc-文とその和訳のもとになった英語原文の対応関係には、一定の問題がある。上のc-文における連用形「生き」は、語彙の意味に関しては、英文“My grandfather lived to be ninety.”（江川, 1991:319）におけるlivedに対応している。しかし、このlivedは、文法的には定動詞（finite verb）であって、不定詞ではない。ここで対応を観察しようとしているのは、語彙の意味の対応関係ではなく、主に英語の不定詞と日本語の連用形の文法上の対応関係である。「生き」は連用形である。このc-文における動詞「生き」（連用形）は、語彙の意味に関しては、英語のto be

(iv) a. メアリーは美味しいコーヒーをいれるために高級なコーヒー豆を買った。

b. *メアリーは美味しいコーヒーをいれに高級なコーヒー豆を買った。

（筆者の作例）

このように、連用形/infinitiveで目的を表わすことができないという観察は、たとえ以上の事例を考慮に入れても、変わることはない。

(文法的には不定詞)に対応するわけではない(図1参照)。

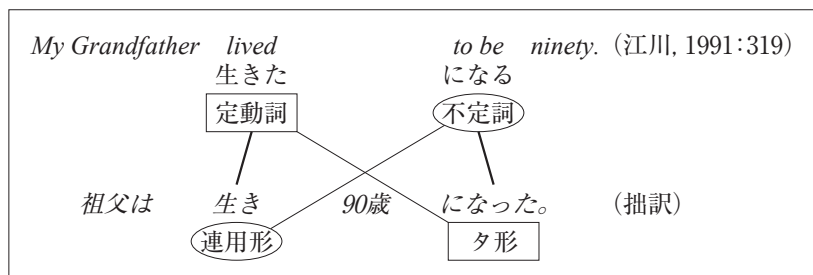


図 1

上記の問題も含めて、この副詞用法の結果の和訳について、もう少し詳しく見ておくことにする。

英語の不定詞to beは、上のb-文の直訳①では、「その結果、～になった」というふうにタ形として和訳し、また、c-文の直訳②でも、「～になった」というふうにタ形で訳出している。このc-文においては、上で示した「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」(次に再録)が、確かに保たれている。

(23) 連用形による日本語連続動詞構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 1 は infinitive. (= (12))

c-文、すなわち、「祖父は生き、90歳になった。」(拙訳)において、「生き」は「動詞 1」に当たり、「になった」は「動詞 2」に相当している。

これに対し、このc-文(「祖父は生き、90歳になった。」)のもとになった英語原文を次に再録する。

(24) My grandfather lived to be ninety.

(江川, 1991:319)

この英文では、上で示した「英語連続動詞類似構文の一般形式」（以下に再録）が確かに保たれている（“lived”が「動詞1」に当たり、“to be”が「動詞2」に当たる）。

(25) 英語連続動詞類似構文の一般形式：

動詞1 + 動詞2, ただし動詞2はnon-finite. (= (9))

それにもかかわらず、繰り返しになるが、ここには上で指摘した問題がある。ここでのc-文、すなわち、「祖父は生き、90歳になった。」において、「生き」が連用形／infinitiveであるのに対し、それに対応する英文、“My grandfather lived to be ninety.”（江川, 1991:319）においては、「生き（る）」に当たる英語動詞livedが定形（finite）として現れており、不定詞（infinitive）の形をとっている英語動詞は、“to be”（“to be ninety”の“to be”）である。この“to be (ninety)”に相当する日本語動詞は、「祖父は生き、90歳になった」における「(90歳) になった」というタ形の動詞である。

このことには、副詞用法の目的の英文を和訳する際には、いわゆる「戻り訳」、「返り読み」が使われないという事情が影響していると考えることができる。ここで参考のために、上で引用した英語不定詞の副詞用法の目的の例、“What are the raw materials used to make plastic?”（江川, 1991:319）が、「プラスチックを作るために用いられる原材料は何ですか。」（直訳）と訳すことができたことを思い起こそう。“to make plastic”は、“used”に後続している（すなわち、前者は後者の右側に生起している）。一方、日本語訳においては、「プラスチックを作るために」が「用いられる」に先行している（すなわち、前者が後者の右側に生起している）。このように、副詞用法の目的においては、和訳の際に、日常一般に、「戻り訳」、「返り読み」などと呼ばれる和訳方式が用いられることが多い（「戻り訳」、「返り読み」は、日英語における語順の対称性を明確化する面もある和訳方式であるともいえる）。それに対し、副詞用法・結果においては、「戻り訳」、「返り読み」は用いられない。このことが、上で指摘した

副詞用法・結果における特別な性質の根底にあると考えることができる⁵⁾。

英語不定詞の副詞用法の目的の例文を和訳する際に、日本語の連用形／infinitiveを用いることが一応はできるが、上で見たように、語順に関して複雑な様相を呈する点も確かにある。とはいえ、その英語例の和訳が、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」における、「動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 1 は infinitive.」という形と合致しているということを、筆者はここでは重視したいと考える。また、英語不定詞の副詞用法の目的の例文を連用形／infinitiveを用いて和訳する場合、その訳文は、なるほど日本語としてやや不自然な面もある。とはいえ、筆者は、その日本語の不自然さは許容範囲にとどまるものと判断する。

(C) 副詞用法の原因（感情などの原因）

上の議論では、副詞用法の（感情などの）原因の例として、“We are delighted to learn of the arrival of your baby.”（江川, 1991:319）を引用したが、それに対応する和訳としては、次のようなものを考えることができる。

(26) a. 赤ちゃんがお生まれになったと伺って喜んでいます。

（江川, 1991:319）

b. 赤ちゃんがお生まれになったと伺い、喜んでいます。……（直訳）

（拙訳）

すぐ上に示した和訳の a-文（江川訳）では、「……と伺って」というテ形が用いられているのに対し、b-文（拙訳）においては、「……と伺い」という連用形／infinitiveを使用している。このように、英語における「副詞用法の（感情などの）原因」の例の和訳については、日本語の連用形／infinitiveが英語不定詞に対応し、また、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」、すなわち、「動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 1 は infinitive.」が当てはまっていると考えることが可能である。

5) 「戻り訳」、「返り読み」とは対立する「下り訳」については、光原（1990）を参照。

(D) 副詞用法の理由（ある判断の根拠になる理由）

上の議論では、副詞用法の（ある判断の根拠になる）理由の例として、“What a fool I was to think that she really loved me!”（江川, 1991:319）を引用したが、それに対応する和訳としては、次のようなものを考えることができる。

- (27) a. 彼女が本当にほくを愛していると思ったなんて、なんてばかだったんだろう。

（江川, 1991:319）

- b. 彼女が本当にほくを愛していると考え、なんてばかだったんだろう。

（拙訳）

すぐ上に示した和訳のa-文（江川訳）では、「……と思ったなんて」という形で「なんて」という要素が用いられている。それに対し、b-文（拙訳）においては、「……と考え」という連用形／infinitiveを使用している。この副詞用法の理由の例文の日本語訳については、すぐ上の例のa-文（「なんて」という形式を使用）が標準的な和訳であり、b-文（連用形／infinitiveを使用）はややぎこちなく、「彼女が本当にほくを愛していると考え、……」という、文の前半部分が、後半部分である「……なんてばかだったんだろう」の表す根拠を示しているというニュアンスも余り強くない。この点で、上のb-文は境界的であるといえる要素を含むが、とはいえ、連用形／infinitiveを使用したb-文も、まったく使えないわけではない。また、対応する英文“What a fool I was to think that she really loved me!”（江川, 1991:319）の本来の意味からあまりにも逸れた意味を表わすわけでもない。このようなことから、英語における「副詞用法の（ある判断の根拠になる）理由」の例の和訳について、英語不定詞に日本語の連用形／infinitiveが対応し、また、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」、すなわち、「動詞1 + 動詞2、ただし動詞1はinfinitive.」が当てはまっているとすることは、基本的に可能である。

9. 不定詞の各用法の和訳についてのまとめ

以上の英語不定詞の諸用法に日本語の連用形／infinitiveが適切に対応するかということについての確認結果を表の形にまとめると、次のようになる。

用法		値	備考
名詞用法		－	完全な名詞化を行うことはできる。
形容詞用法		－	
副詞用法	目的	－	
	結果	＋	動詞の位置等に関して日英間で対照的となる点がある。
	(感情などの) 原因	＋	
	(ある判断の根拠となる) 理由	＋	ややぎこちない。

表 1

上の表1において、値が正の値(+)を取る場合、当該の英語不定詞の用法に対して日本語の連用形／infinitiveが対応しているということを表すものとする。一方、負の値(－)を取る名詞場合、当該の英語不定詞の用法に対して、日本語の連用形／infinitiveが対応していないということを表している。この表1のなかで英語不定詞の名詞用法、副詞用法の結果、および、副詞用法の理由については、備考欄への記載があり、それらはいずれも、左隣にある値の極性を弱める性格を持つ。そのようなことをより単純化された形で表現することができるように、上の表1を修正するとすれば、次のようなものになるであろう(“++”と“--”は極性が比較的明確に観察されることを示し、“+”と“-”は、極性がやや弱められた形で観察されることを示す)。

用法		値
名詞用法		-
形容詞用法		--
副詞 用法	目的	--
	結果	+
	(感情などの) 原因	++
	(ある判断の根拠となる) 理由	+

表 2

このように、英語不定詞の諸用法のなかで、用法によっては連用形／infinitiveが対応するものもあれば、対応しないものもある。また、対応しないといっても、その対応しないことの程度の弱いものもあり、また逆に、対応するとしても弱い対応しか示さないものもある。このような状況は、概略のところ次のように図示することができる。

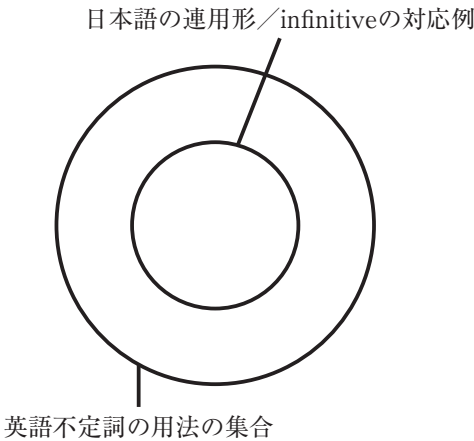


図 2

上の図2においては、英語不定詞の用法の集合の一部が、日本語の連用形／infinitiveの例と対応している状態が示されている。ただし、本稿では、英語の不定詞に対応する日本語の例を分析したのであり、逆に日本語の連用形／infinitiveの諸用法にどのような英語表現が対応しているかということも含めた、徹底した調査は本稿における調査の対象には入っていなかった。おそらくは、図2の根底には、次のような状況、すなわち、英語不定詞の用法の集合が、日本語の連用形／infinitiveの用法の集合（「連用形／infinitiveの〔対応〕例」ではない）と、一部交わっている箇所がある、という状況を反映している可能性があると筆者は推測している。

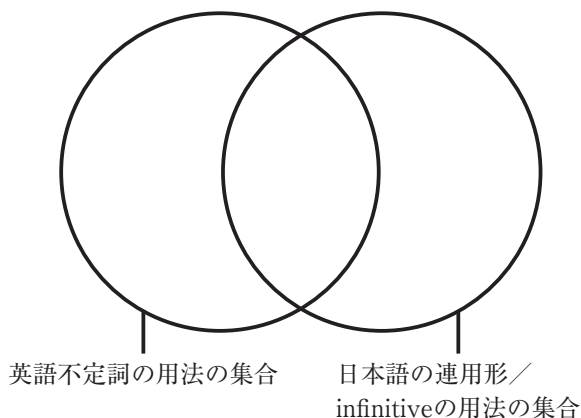


図3

とはいえ、すぐ上の図3に示された状態は、単に理論上推測されるものに過ぎず、本稿の中でより実証的に確認し終えたものは、先に見た図2によって示された状態である。

そのような状況のもとで、とにかくこのように日本語の連用形／infinitiveには英語の不定詞と同一視することができる要素と、同一視することができない要素とが混在しているということができる。

もし、日本語の連用形／infinitiveが英語の不定詞と同一視することがで

きるのであれば、上で見た、次の日本語・英語の形式は、言語普遍論の観点から本来、日英語間で共通していると考えられることのできる、同一の形式が日英語間の語順に関する類型論上の相違のために、実際には2つの異なる形式として具現化しているのであると解釈することができるかもしれない。

(28) 連用形による日本語連続動詞構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 1 は infinitive. (= (12))

(29) 英語連続動詞類似構文の一般形式：

動詞 1 + 動詞 2, ただし動詞 2 は non-finite. (= (9))

しかしながら、上の図2が示すように、日本語の連用形／infinitiveと英語の不定詞は部分的に対応するものの、完全には対応しているとは言えない。そのようなことから、上記の解釈（すなわち、「言語普遍論の観点から本来、日英語間で共通していると考えられることのできる、同一の形式が日英語間の語順に関する類型論上の相違のために、実際には2つの異なる形式として具現化しているのである」とする解釈）は、少なくともそのままの形では支持することができない。とはいえ、他方において上の日英語にみられる2つの形式には間には、緩やかな類似性がみられることも否定し得ない。このことは、冒頭で触れた、英語が動詞連続を認めない言語であるのに対し、日本語が動詞連続を認める言語であるという、一部の論者に見られる言語類型論上の判断について、疑問の余地があることを示唆しているとみなすことも可能である。

10. 結 び

以上の議論を通して、本稿冒頭に掲げた「連続動詞構文が日本語、及び、英語に見られるのか、見られないのか、という問題を解明する」という目的について、現段階で示すことのできる、一定の見解を示唆すること

ができたのではないかと考える。

日本語動詞の連用形が英語の不定詞に対応する可能性があることに基づいて、「連用形による日本語連続動詞構文の一般形式」と「英語連続動詞類似構文の一般形式」を仮定し、両者の間にそれほど大きな違いが存在しないという可能性を検討した。そのために、英語の不定詞の主要な用法の各々に、日本語の連用形／infinitiveが対応するかどうかを分析した。そして、その結果として、日本語の連用形／infinitiveについて、英語不定詞と対応するといえる点と、対応していると言えない点が共存しているという状態であることを本稿は示した。

このことは、日本語における連続動詞構文が英語の連続動詞関連構文と共通した特性を持つ可能性があるものの、2つの言語が連続動詞構文に関係した特性を完全に共有していると断定することはできないということを示唆している。

日本語の連用形／infinitiveに特有の文法的振る舞いについて、さらに詳細な分析が必要であるという面が残されており、また他方において、英語の不定詞を、西洋語のより広い文脈の中で再確認するという作業などが残されている。これらの問題を含む、関連した諸課題についての分析、考察を、今後の課題として継続していくことが求められる。

参考文献

浅尾仁彦 (2009), 「動詞連続の文法的性質を捉え直す：日韓対照を通じて」.

関西言語学会第34回大会ワークショップ「複雑述語の形式・機能とダイナミズム」. 6月6-7日 (神戸松蔭女子大学) [pdf]

Declerck, Renaat (1991), *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo, Kaitakusha.

江川泰一郎 (1991), 『英文法解説－改訂三版－』, 東京, 金子書房.

郡司隆男 (2011), 「日本語はどんな言語か? : 類型論的観点からの日本」, 『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin : トークス』, Vol.14, pp. 1-14. [2023年7月アクセス].

池田菜採子 (2013), 「B.Blochの活用論の成立：影響を与えた先駆者たち」,

- 『金城学院大学論集．人文科学編』, Vol. 9, No. 2, pp.170-201.
- Iwasaki, Shoichi (2013), *Japanese, Revised edition (London Oriental and African Language Library, 17)*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.
- 小泉保 (2008), 『現代日本語文典』, 東京, 大学書林.
- Kuno, Susumu (1973), *The Structure of the Japanese Language*, Cambridge, MIT Press.
- Martin, Samuel (1975), *A Reference Grammar of Japanese*, New Haven, Yale University Press.
- Martin, Samuel (1987), *A Reference Grammar of Japanese*, Vermont and Tokyo, Turtle.
- 光原百合 (1990), 「下り訳の原理」, 『言語研究』, 日本言語学会, 1990巻97号, pp.177-178.
- 村田和久 (2013), 「 $v *P$ と $p *P$ の平行性」, 『大阪学院大学 外国語論集』, Vol. 66, pp. 45-67.
- Pullum, Geoffrey K. (1990), “Constraints on Intransitive Quasi-serial Verb Constructions in modern Colloquial English,” *Working Papers in Linguistics*, Vol. 39, pp. 218-239. Columbus, OH, The Ohio State University.
- Shibatani, Masayoshi (1990), *The Languages of Japan*, Cambridge, Cambridge University Press.
- 多胡友梨恵 (2010), 「移動動詞「行く」の直前に現れる「に」と「へ」の使い分けについて－1940年代、1950年代の文学作品から－」, 『思言 東京外国語大学記述言語学論集』, Vol. 6, 103-10
- 山田敏弘 (2004), 『国語教師が知っておきたい日本語文法』, 東京, くろしお出版.
- 国税庁「年の中途中で法人成りをした場合の法定調書の提出」,
<https://www.nta.go.jp/law/shitsugi/hotei/1/03.htm>
[2023年10月アクセス].